

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 氷見市立朝日丘小学校・教諭・稲垣恭子
2 研修期間 令和3年12月19日(日)、25日(土)、26日(日)
令和4年2月17日(木) 4日間
3 調査研究課題 自分と向き合い、学び続ける児童を育てるための授業づくり
4 研修機関等 上越教育大学大学院 学校教育研究科 臨床・健康教育学系
村中智彦教授

5 研修の概要

(1) はじめに

小学校にて、知的障害特別支援学級の担任をしている。昨年度、コロナ禍の中、長期休業に入り、子供たちの学びが止まってしまうという経験をした。一人になってしまうと課題に向き合うことが難しいという子供の実態、学習のために環境を整え、活動を通しての学習や、友達との協働学習ができないという現実に対し、今までの授業づくりの中に、足りないものがあると感じた。また、どの子供も「勉強が分かるようになりたい」という願いをもっているが、自分で学ぶことができないということは、その願いを満たしていない、学んだことが身に付いていない、ということなのではないかとも感じている。

そこで、自分と向き合い、今までの経験を生かしながら、自分の力で学び続けることができる子供を育てるための授業づくりについて研究をしたいと考えた。

(2) 研修日程

日程	内容	研修場所
12月19日(日)	学校教育と共生社会 ～インクルーシブ教育システム～	氷見市立朝日丘小学校 (ZOOM)
12月25日(土) 26日(日)	村中研究室ゼミ参加 (大学院修論経過報告会)	上越教育大学
2月17日(木)	氷見市立朝日丘小学校 研修会 「障害のある児童も、ない児童も、わかる・参加できる 授業づくり」	氷見市立朝日丘小学校 (ZOOM)

(3) 研修内容

①学校教育と共生社会 ～インクルーシブ教育システム～ (村中教授の説明より)

○インクルーシブ教育とは

- ・インクルーシブ教育とは、障害のある人、ない人、性別、年齢、国籍、性的嗜好等、子供も多様性を認め、一緒に学ぶことを指す。多様性は、認めがたい。違う部分に注目していると、受け止めにくいですが、同じ部分に注目していくと、理解しやすい。

○マジョリティ (多数派) とマイノリティ (少数派) について

- ・マイノリティからの投げかけは多いが、マジョリティはそれを受け入れてくれないことが多い。しかし、世の中を変えていくのは、どちらの立場の人達か、考えていかななくてはいけない。
- ・支援学校と支援学級、通常級の違いを理解し、保護者に正しい理解を求めていく必要がある。私たち、そして、保護者の考え方が、「逆の差別」になっていないかを見直してみなくてはいけない。

<保護者からの要望の例>

「障害があっても地域の学校に通わせたい。差別してほしくない」

「とにかく普通の子と一緒に」

「支援学級はちょっと・・・でも、個別の支援をお願いします」

○インクルーシブ教育を実現するための手段としての「合理的配慮」

- ・合理的配慮とは、障害のある子供たちが、他の子供と同様に教育を受けられるように、学習参加が保障される学習環境を整備、改善することである。法（障害者差別解消法）によって、保障されている。配慮しないと、法に触れることになる。
- ・障害のある子供が、学習目標を変更することなく、子供の実態に応じて、目標を達成できるように、配慮、手立てを行うようにする。教師が柔軟になり、子供の実態に合わせて支援を考えていく。しかし、それが他の子供の活動を阻害するようであれば、合理的配慮にはならない。

<講義からの学び、感想>

支援学級の子供たちは、口には出さないが、「頑張っても他の友達と一緒にすることができない」「自分は友達と少し違う」ということを感じている。しかし、彼らは、特別な配慮をしてもらうことで、他の子供と同じ学び、活動ができる。「自分ではできない」という考えから、子供たちが、「こういうふうになればできる」と考えることができるように、支援をしていきたい。合理的配慮が、当たり前のように施されるとよいと思う。

一部の保護者、そして、子供たちも、差別的な目で支援学級のことをみている場合がある。「うちの子には、特別な支援はいりません」と、支援学級や通級指導教室のことを遠ざける保護者もいる。単一民族、島国である日本で、少数派の異文化が、すべての人に認められることは、難しいことである。しかし、私たちも、事故や病気で、少数派側になる可能性はある。「違う部分に目を向けるのではなく、同じ部分に注目していく」という考え方を大切に、柔軟に異文化を受け入れることができる自分でありたいと感じた。教師という立場の私が、柔軟にいろいろなものを受け止め、対応していくことで、全ての子供たちが、「一人一人、違って当たり前」という考えをもち、支援学級の子供たちも、胸を張って「僕は支援学級です」と言うことができるようになってほしい。

②富山県小学校教育研究会小学校提案授業の村中教授による助言 ～村中研究室ゼミ参加～

国語科「くわしく伝えよう」という授業について、ゼミで発表をし、指導助言をいただいた。

○単元について

- ・単元名「くわしく伝えよう」の言葉を置き換えると、「くわしく」は、「豊かに」、「伝えよう」は、「表現する、話す」ということで、すなわち、「表現を豊かにしよう」ということになる。授業は、「話すこと・聞くこと」の内容にみえるが、評価や成果の部分は、「書くこと」を取り上げている。国語科の学習内容は、「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」の領域になるが、この授業では、どの領域に重点を置くのかを、明確にする必要がある。
- ・学んだことを、生活の場で活用できるように工夫するとよい。

○教材について

- ・児童の実態から、児童の関心がどこにあるのかを探った上で、スクラッチ・ジュニア等の教材が選ばれている。
- ・文作りに関して、主語、述語のみの文に、修飾語を少しずつ付け足していくという方法は、子供に負担がかかりにくい。学習の過程で、できるところから、少しずつ難しくしていくということが大切である。

○授業づくりについて

- ・異学年、能力差のある集団の中で、互いに教え合うという、「モデル効果」を有効に利用するとよい。
- ・授業の目標を達成するために、バランスを考えながら、個別、ペア、グループ等、様々な学習形態で学ぶとよい。
- ・コミュニケーションを取りやすいのは、本来、2人組である。5人組の方が、話が盛り上がるように見えるかもしれないが、5人全員が平等に話をしていない。話合いの内容について、よく理解している2人くらいが話をし、後の3人は、それを静かに見ているようなことはないだろう

うか。2人組で、話し合いができないということは、コミュニケーションの力がないということである。話し合いのためのスキルを身に付けなくてはいけない。

<講義からの学び、感想>

授業をするに当たり、平仮名ですら、一文字一文字、思い出しながら書いている子供たちに、「書くこと」を求める授業は、負担が大きいと感じたため、「話すこと・聞くこと」に重点を置いた授業にしようと考えていた。しかし、授業の評価は、子供たちが書いた文を参考に行った。「詳しく伝える（表現する）ことができる」ということを評価する場合、何を、どのように評価すればよいか、指導要領をよく読み、考える必要があった。

対話的な授業を成り立たせるためには、子供たちのコミュニケーション能力を高めなくてはならないことに気が付いた。低学年の児童には、友達と一緒に活動する際に、「せーの」と声をかけ合ったり、「分からないから教えて」と、自分から声をかけて友達同士で教え合ったりするなど、コミュニケーションの基礎となる部分から、丁寧に指導をしていく必要があると感じた。対話的な授業を成り立たせるために、自立活動の時間等を活用しながら、コミュニケーション力を高めていきたい。

③「障害のある児童も、ない児童も、わかる・参加できる授業づくり」

～氷見市立朝日丘小学校 研修会～（村中教授の説明より）

○特別支援教育とは

・特別な支援が必要な子供に、一人一人のニーズに応じて、診断に関係なく、できる限りの支援をしていく。支援学級入級（常時支援ができる）、通級指導教室（ときどきの支援）の利用で、子供と、その家族への丁寧で、細かな支援体制がスタートできる。支援の必要な子供の親に対しても、支援が必要な場合が多い。家族も含めての支援を考えていく。

○発達障害とは

・本人や、周囲の人の努力により、治癒する障害ではない。個々の特性により学習をしても、完璧にはならないことが多い。そのため、できること、できないことに折り合いを付け、その人なりの学びや道を探し、導いていく必要がある。その人なりの学びや道を認め、許していくことが大切である。

○学びのユニバーサルデザイン

- ・教師にとっては伝えやすい、子供にとっては分かりやすいということが大切である。「学びのユニバーサルデザイン」とは、教師と子供のコミュニケーションの問題といえる。
- ・ユニバーサルデザインに基づく授業とは、すべての子供が「分かる」「できる」ことを目指した授業であり、一人ひとりの学び方の違いに応じて、いろいろな学び方が選べる授業である。（涌井、2014）
- ・学びのユニバーサルデザインとは、今行っている伝え方や教え方を、できる限り、子供たちが分かって動けるように、できるように改善することである。新たにもち込むものとして考えるのではなく、今行っていることを見直すこと、付け加えることと考えていく。自分の言いたいことは、子供たちに伝わっているか、子供たちとコミュニケーションは取れているか、今一度、見直してほしい。

<講義からの学び、感想>

学びのユニバーサルデザインとは、「教師と子供のコミュニケーションの問題である」という言葉が心に残った。授業を行う際、どうしたら子供たちに、私が言いたいことが正しく伝わるだろうかと考え、言葉を選んだり、教材を用意したりする。コミュニケーションの本来の意味は、「意思伝達、情報伝達」である。教師が、伝えたいことを、どんな子供にも分かるように伝えようということが「学びのユニバーサルデザイン」になると考えると、それは、特別なことではないということがよく分かる。目の前の子供たちの実態をよくみて、言葉や絵の活用等、子供に応じた、分かりやすい伝え方ができるよう、教材研究を進めていきたいと思う。「分からない」という子供に問題があるのではなく、教師の伝え方に問題があるという考え方が定着していくとよいと感じる。

(4) 終わりに

「自分と向き合い、自分の力で学び続けることができる児童を育てたい」という思いで、研修に取り組んできた。研修の中で、「特別支援教育とは」「発達障害とは」という、障害児教育の基礎を学び直し、私が子供たちに求めてきたことは、子供の実態に合わなかったのではないかと感じるようになった。

自分と向き合うためには、自分で自分の得手不得手を知ることが必要だと思われる。そうすることで、自分の学び方が分かる。そして、何より、「学びたい」という気持ちを育てなくては、一人で学び続けることはできない。そのために、まず、子供たちの実態を把握し、これから伸ばさなくてはいけない力は何か、子供のもつ力だけでは補い切れない、支援が必要な部分は何かを探り、適切な指導をしていかななくてはならないと考える。教科の学習も大切ではあるが、学力を付けるためにも、その基礎となるものを育てていかななくてはならない。そして、「分かった」「できた」という達成感をもつことができる授業を考え、子供たちが自信をもって学習に取り組み、学びに対する意欲を高めていくことが大切である。「勉強することは楽しい」と、どの子供も感じる事ができる授業をしていくことが、「もっと学びたい」と、自分の力で学び続けることができる子供を育てることになるのではないかと考える。

今回の研修を、今後の授業づくりに生かし、子供たちが、「分かった」「できた」と、自信をもって、意欲的に学ぶことができる時間を積み重ねていきたい。そして、学んだことを生かし、「もっと勉強がしたい」と、自ら学習に取り組む子供を育てていきたい。

最後に、今回の研修に当たり、コロナ禍の中、たくさんのご配慮の下、快く研修を引き受けてくださった上越教育大学、村中智彦教授に心より感謝を申し上げます。そして、派遣研修を許可していただいた富山県教育委員会をはじめ、氷見市教育委員会、朝日丘小学校校長、澤武俊一先生や教職員の皆様にも感謝を申し上げます、研修報告といたします。